

## 「日本外交の構想力」を考える(3)

— 茂木敏充外務副大臣をお迎えして —

開倫塾

塾長 林 明夫

林：お早うございます。開倫塾の塾長の林明夫です。今朝の開倫塾の時間も衆議院議員で外務副大臣であられる茂木敏充先生をお招きしてお話をお聞きしたいと思います。先生、よろしく願いいたします。

茂：こちらこそよろしく願いいたします。

林：今日で3回目ですけれど、茂木先生は先日「日本外交の構想力」という素晴らしい本を徳間書店からお出しになりました。今日はそれにも関係すると思いますが、北朝鮮問題についてお話を伺いたいと思います。先生、よろしく願いします。

茂：はい。先週はイラクのことについてお話をし、今週はもう一つの大切な問題である北朝鮮についてということになります。8月末に北京で開催された6カ国協議(日・米・韓・中・露・北朝鮮)で、北朝鮮の核の問題を中心に話し合ったのが1回目の協議でありましたが、大きな進展は最初から期待はできなかったのですが、少なくとも継続協議は行われることになり、おそらく2回目の協議が今月末から来月ぐらいに開かれるのではないかと考えています。協議が継続になっただけでも私は一つの成果ではないかと考えます。

林：大変な裏舞台というかご努力だったのではないかと思います。どんな感じなのでしょう。

茂：例えば、北朝鮮と対応するに当たってはワンボイスということが非常に重要なんです。みんなで同じことを言うという。例えば、日本の言っていること、アメリカの言っていること、韓国の言っていることがバラバラだと、交渉で相手側につけ入る余地を与えてしまいますから、いつも事前に3カ国の間で協議をしたり、中国とも打ち合わせをしたりするのですが、8月の協議の時は、私も事前にワシントンに行きまして、あちらの交渉の責任者でありますケリー国務次官補、それからその上司で私の仕事相手、つまりカウンターパートナーであるアーミテージ副長官とも話してきました。そこで、こんな感じでお互いに話を進めようと、例えば拉致の問題にしても、日本は6者協議の場で必ず拉致の問題を持ち出したいのだと、そして日本が拉致の問題を持ち出したときにはアメリカにも側面からサポートして欲しいと要請しました。これに対しアメリカも、もちろんそうすると伝えてくれ、実際にこの問題については6者協議の場でも取り上げるということになりました。北朝鮮の方は、拉致の問題を6者協議で持ち出されては困るということだったのですが、もちろん向こうが悪いことをしたわけですから、是非とも取り上げるという姿勢で臨みまして。3日間の

協議の中で、2日目に日本と北朝鮮の2者会談を2回やったのですが、すでに6者協議で拉致の問題を出していましたから、向こうの態度が少し硬いこともあったのですが、最終的には3日目に北朝鮮のキム・ヨンイルという国務次官であり、団長でもある人物から、日朝間の問題については、拉致の問題も含めて日朝平壤宣言に沿って解決したいという発言を引き出せました。これは大きな進展であります。なぜかというと、日本側にとっては拉致の問題は確実に日朝平壤宣言に含まれるという認識なのですが、そこには拉致という言葉は使われていません。しかし、北朝鮮側が日朝平壤宣言に沿って拉致の問題も含めて解決したいというのですから、日朝平壤宣言に拉致の問題も含めるということを自ら認めたこととなります。ここ数ヶ月間は押し問答が続いていまして、「拉致は解決済みだ」と向こうは言うてくるわけですが、日本からすれば5人の被害者の方は帰ってきたけれどその家族は帰ってきていない、ましてそれ以外の行方不明者、消息がはっきりしない人がたくさんいるわけで全く解決なんかできていない。こういう立場の違いがあったのですが、「拉致を含め一つ一つの問題」を解決したいということですから、拉致が解決済みではないということを手前側が認めたという事でありまして、こういう2つの意味から進展はあったと思っています。

林：相当粘り強い交渉をなさっているのですか。

茂：やはり交渉ですから、水面下の動きは様々あるわけですし、時間をかけてでもきちんとした交渉をしたいというのが今回の日本の考えであり、アメリカ、韓国側のスタンスでもあったと考えて頂いてけっこうだと思います。

林：茂木先生の「日本外交の構想力」という本を読ませて頂くと非常に詳しく書いてあるのですが、政治家の方と事務当局の方が協力して非常にスピーディーにやられているということですが、これはどういうことなのでしょう。

茂：イラクのことについては先日もお話したように、外務省にオペレーションルームを作って、大臣、副大臣、事務方のメンバーが一致団結して色々な対応ができたなと思っています。北朝鮮の問題につきましては、いつか「対話と圧力」という言葉について、事務方が「圧力」という言葉はどうだろうかと言ったことについて色々な意見があり、ある人は対話派、ある人は圧力派と、一政策を決定するまでは様々な議論がありました。しかし、これはあって当然なのです。ただ、政府として、外務省として、一旦方向を決めたらその方向でみんなが動く、こういうことでうまく動いているんじゃないかと思っています。

林：特に課長クラスの方が素晴らしいということなのですが。

茂：ちょうど課長クラスが私と同じ年代か少し若い年代なのですが、その上の年代と感覚が少し違うのです。50代以降の外務省の人間というのは「第2次世界大戦の敗戦世代」なのです。それに対して30代から40代の今の中堅の外務省の人間というのは「東西冷戦の戦勝世代」なのです。負けてサンフランシスコ条約云々ということより、冷戦構造下、あるいはそれが終わって日本が勝ち組に加わった後の世代が中心になっているので、自信を持っているというところがあります。た

だ、日本外交も今が曲がり角でありますから、きちんとした構想だけは政府が出すという姿勢だけはとり続けていかななくてはならないなと思っています。

林：有り難うございます。今日の開倫塾の時間は、前回、前々回に引き続きまして、衆議院議員の茂木敏充先生をお招きしてお話をお伺いしました。茂木先生ほど、バリバリと、外国まで行かれて色々な交渉をされている方はいらっしゃらないと思うのですが、是非これからも頑張ってご活躍されるようお願いいたします。

茂：この1年間で24万キロも飛行機に乗っているんです。ちょうど地球を6周したということですけど、元気にやっておりますので、これからもよろしくお願いします。

林：交渉はみな英語でされたのですか。

茂：英語です。みんな。

林：そうですか（笑）。失礼なこと伺いました。是非ご活躍戴ければと思います。有り難うございました。

茂：有り難うございました。